



時代を拓き 世界に貢献する人を目指して

# Global View

2016年10月21日 Newsletter 第47号 仙台白百合学園中学・高等学校 国際教育部

## 「ソボレフスキー国際ピアノコンクール」 教育実習生 山王 智世先生（芸術科・平成24年度卒業生）

私は、2016年2月22日～26日にロシア極東の首都ハバロフスクにて開催されたソボレフスキー国際ピアノコンクールに出場しました。コンクールに挑戦するのは今回が初めての経験でした。その理由は、私は極度のあがり症で、コンクールなんて夢のまた夢だと思っていたからです。しかし、大学で出会った先生が私と真剣に向き合い熱心な指導を下さったおかげでコンクールに出場することとなりました。

日本での書類審査、テープ審査を通過し私はロシアへと飛び立ちました。2月のロシアは-20度で、外に出ただけで鼻の中がシャキシャキと凍りついてしまうほど寒いところでした。

“国際コンクール”という私には大きすぎる舞台でしたが、せっかくロシアまで来たのだから自分らしく楽しく演奏しようと心がけ、なんとかファイナルまで残ることができました。そして結果発表…私は第2位を受賞しました。まさか入賞するとは思っていませんでしたので、当時は信じられませんでした。

結果発表が終わってからはとても忙しかったです。受賞記念ガラコンサートに出演が決まり、正指揮者チグラン・アフナザリヤン率いる極東アカデミー交響楽団と共にシューマンのピアノ協奏曲を共演することになりました。翌日から指揮者との打ち合わせやオーケストラとのリハーサルが行われ、いよいよ本番です。オーケストラとの共演は初めてでしたが舞台袖から恩師の先生が応援してくれていたこともあり、落ち着いて演奏することができました。演奏が終わった後の拍手や歓声は今でも忘れられません。

私がピアノを始めたのは4歳の頃でした。母がクラシック好きだったことや自宅にピアノやオルガンがあり、音楽に親しむ環境が整っていたことも影響していると思います。ピアノを習い始めた頃とはとにかく楽しくて毎日何時間もピアノを弾いていました。しかし、年々曲の難易度も上がり、勉強や部活動との両立も大変になりました。それでもピアノが好きだったので、朝早く起きて練習するなど工夫して取り組みました。

音楽の道に進みたい、そう決めたのは高校1年生の終わりに起きた東日本大震災がきっかけです。家族は全員無事でしたが、自宅が津波の被害に遭い多くのものを失いました。長年愛用していたピアノも水浸しになりました。失って初めて自分はピアノが大好きだったのだと実感し、大学では音楽を学びたいと思うようになりました。

大学に入学してからは、大好きな音楽を学べることに幸せを感じながら充実した毎日を送っています。また、ボランティア活動にも積極的に参加しています。私は高校時代、社会奉仕部小百合会の部長として活動していました。施設訪問や街頭募金活動、他校と合同でのボランティア活動発表会にも参加し、多くのことを学ぶことができました。この学園で培ったボランティア精神のもと、現在は病院や高齢者施設、仮設住宅地を訪問してのボランティアコンサートなど様々な活動を行っています。



仮設住宅地を訪問しての演奏会では、同じく卒業生で大学でも一緒に学んでいるヴァイオリンの郷家由梨花さんと共に演奏しました。このようにボランティア活動に積極的に取り組むことができるのも白百合生ならではのだと思います。

この学園には自分の好きなこと、やりたいことを見つけることができる素晴らしい環境が整っています。私はそんな環境で学ぶことができたことを誇りに思います。また、教育実習生として仙台白百合学園にお世話になり、素晴らしい先生方と生徒の皆さんのもとで実習させていただけたことにとっても感謝しています。



## 第 51 回 国際理解に関する弁論大会(宮城県国際教育研究会主催)

9月7日(水)、本校視聴覚室を会場として、第51回国際理解に関する弁論大会が行われました。この大会は、「高校生の国際理解を深めさせると共に国際協調の精神を養い、併せて高校生間の相互理解に寄与する」ことを目的として毎年行われています。今年度は、本校から4名の生徒が出場し、2名の生徒が賞をいただきました。

### 宮城県高等学校国際教育研究会長賞(第3位)「平和のバトン」 高校Ⅱ年3組(LI) 八幡 莉里花さん

「あなた日本人だよね。」

クラスメイトからの突然の問いかけに、私は、言葉を詰まらせてしまいました。昨年、私は母の祖国オーストラリアに留学していました。学校の歴史の授業で、第二次世界大戦について、オーストラリアの視点から初めて学ぶ機会を得ました。戦時中、長期にわたって日本から攻撃を受けていたことを教わり、私は、「なんてひどい悲劇を起こしてしまったのだろう。」と胸が痛みました。その時です。「あなた日本人だよね。」反論もできず、「ああ、うん、そうだよ。」としか答えることができませんでした。これまで感じたことのない日本人であるという罪悪感。初めて、「わたし」という存在と「歴史」が重なり合った瞬間でした。かつて、日本とオーストラリアは憎しみ合っていました。あれから長い年月が流れ、両国に訪れた、限りなく尊い平和。それは、どのようにして生まれたのでしょうか。

私の母は日本に滞在していた時に、父に出会い、国境を越えた愛が私という命に繋がりました。私は、母の育った環境で、高校生活を送りたいという思いから一年留学を決断しました。留学中、母の故郷カウラに訪れました。その後、私は祖父に、カウラの町の歴史について聞いてみたところ、次のような事を教えてくれました。

「この町では、1944年に日本兵捕虜が町にあった収容所から脱走するという事件が起きた。この時、両国ともに犠牲者を出してカウラの市民も巻き込まれたのだ。でもね、終戦後、町の人々はオーストラリア兵墓地の隣に日本兵を手厚く埋葬したのだよ。」互いに恐れ合い、理解し合えなかったあの時を認め、赦し合い、憎しみを乗り越えることができたカウラの人々。今も私たちに赦すことから始まる平和の尊さを教えてくれています。

今年5月、国連事務総長パン・ギムン氏の呼びかけによって、史上初の国際人道サミットが開催されました。第二次世界大戦終結から71年が経過した今、紛争や暴力で避難生活を余儀なくされている人の数は最悪の水準になっているといいます。国連は、誰一人置き去りにせず、現地の人々の自立を支援していこうとしています。しかしこのよう

な支援が行われている中、なぜいつまでも紛争は繰り返されるのでしょうか？暴力の連鎖はどうすれば打ち切ることができるのでしょうか？

私が、もし、国連事務総長だとしたら、皆さんの前で次のように訴えます。

「争いの要因は、一人一人のところにあります。ユネスコ憲章では、「戦争は心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」と表明しています。暴力を打ち切ることが出来るのは、ただ一つ、赦すところを持つことです。

昨年 11 月、パリで起こったテロで、妻を失ったレリスさんは犯人たちにメッセージをおくったのをご存じですか。「私は痛み打ちにめまされてる。だが、君たちに憎しみを抱かないことにした。望み通りに怒りで応じることは、君たちと同じ無知なところを持つと同じだからだ。」レリスさんはこう述べ、憎しみから解放されることで、幸せで自由な人生を過ごすと言ったのです。私たちも、まず、小さな赦しから始めませんか。赦すことで、自分のところが変わる、赦されたことで相手のところも少しずつ変わります。私たちのところの中にある平和のバトンは一人から始まり、やがて世界中の人々に受け渡されていきます。平和な未来は私たちの赦しのバトンリレーにかかっているのです。」

#### 《八幡莉里花さんから》

今回二度目の国際理解に関する弁論大会に出場させていただきました。国際理解について興味を持っている高校生と交流する機会に参加する事ができてとてもいい経験になりました。私は「赦すことから始まる平和」について弁論しました。暴力がなくなるのは、人々がいつまでも憎しみ合っていて互いに赦す事ができていないからだと私は思います。弁論を通して沢山のことを感じる事ができ、思い出に残る弁論大会になりました。支えて下さった方々に感謝したいと思います。

### **公益財団法人宮城県国際化協会理事長賞 「和解から始まる平和」 高校Ⅲ年 6 組 (LE) 黒沢樹里さん**

今回、国際理解に関する弁論大会で、太平洋戦争の日本と海外の解釈について弁論をしました。学園祭の直後だったこともあり、思うように暗記の練習ができなかったこともありましたが、本番は原稿をあまり見ずに弁論をすることができました。今までは日本語で多くの人々の前で発表する機会が少なく、いい経験になりました。また、自分の弁論だけでなく他校や他学年の弁論を聞くことでさまざまな考え方が聞けて視野が広がりました。

## **第 69 回宮城県高等学校英語弁論大会(宮城県高等学校文化連盟英語専門部主催)**

9 月 2 日 (金)、東北高校にて第 69 回宮城県高等学校英語弁論大会が行われました。この大会では、英語を使って、自分自身のことや自分が考えていることを相手に伝えることの喜びや、英語をより身近なものとして感じてもらうことを目的として行われています。本校からは 2 名の生徒が出場し、第 1 位・第 3 位を受賞しました。

### **第 1 位 Active Learning in a Super Global High School 高校Ⅱ年 5 組 (LS) 石井 美土里さん**

今回、第 69 回英語弁論大会に参加し、第二部で優勝しました。第二部には海外の居住経験や、家族に英語圏出身者がいる生徒が参加します。第二部は、皆ネイティブのような発音ですので、感情表現で差をつけようと考えました。私は、SGH の活動を通して、思考力、判断力、表現力がどのように変化したか、そして今の世の中のグローバル化にどのように対応していくのかをまとめました。11 月には宮城県の代表として東北大会に参加します。更にハイレベルになるとと思いますが、沢山練習して、勝ち進みたいです。

### 第3位 The Right to Learn 高校Ⅱ年3組(L) 八幡 莉里花さん

今回、初めて英語スピーチコンテストに出場させていただきました。出場しようと思ったきっかけは、自分の英語力を試したかったと思ったことと、もっと英語を使いたいと思ったからです。いろんな視点を持った生徒たちのスピーチを聞いてとても良い経験になりました。スピーチコンテストを通して、英語で自分の意志を表現する難しさや、いろんなことにチャレンジをすることの大切さを学ぶことができ、英語を使うことの楽しさを感じることができました。

### 報告「留学先のオーストラリアから」Ⅱ年4組小松未来さん

こんにちは。「ピンチはチャンス」が座右の銘の小松未来です。現在クイーンズランドに留学しています。オーストラリアの人々は映画を観るのが好きなようで、私も留学を始めてから頻りに映画館に行くようになりました。文化の違い、と言うには大げさですが、ほとんどの人は映画のエンドロールが始まったときに席を立ちます。全員と言っても過言ではありません。みなさんはエンドロールを最後まで観ますか？私の経験上日本人にはそういう方が多いと思いますし、私もその一人です。留学中に一度、他の人々が立ち去って行くなか反抗心からエンドロールが終わるまで見続けたことがありました。一緒に映画を観ていた友達にも置いて行かれ、ただ一人残る私と、それに気付かず席の清掃を始める従業員とのあの気まずい時間は二度と経験したくないものです。それからというもの、エンドロールの先にまだ続きがあるのではないか、という名残惜しさを胸に、早めに席を立つ私です。留学中はこのような小さな経験から、国民性の違いを日々痛感しています。

さて、最近オーストラリアの友達が誕生日にタトゥーを彫りました。彼女は16歳になったばかりですが、親の承諾があれば可能な年齢です。こちらの国ではタトゥーは珍しくありませんが、日本ではどうでしょうか。歴史的背景から日本人が持つタトゥーへのイメージは決して良いとは言えず、タトゥーを持つ人でも入れる温泉を探すことは未だに難しいです。特に外国人が多く訪れる2020年のオリンピックに向け、改善が必要な問題の一つと言われています。日本は伝統のある国であり、その独自の文化は世界に誇れるものです。しかし反対に言えば、他国の文化を受け入れることに慣れていないとも言えます。一方で、さまざまな人種の人々が集まり、異なる文化が混じり合ってきたオーストラリアの文化は互いの個性を受け入れることで成り立っています。前者で話した小さな話題から、タトゥーのような大きな話題まで、さまざまな場面でオーストラリアと日本の違いを認識させられる毎日です。国家間の文化の違いにどちらが良いか悪いかを決めることはできず、本当にすべきことはその違いをそのまま受け入れること。それは私が今回の留学で学んだ大切なことです。

